メンバーからの声

ふるさとは遠きにありて思ふもの

Webディレクター
山田タポシ

水戸市生まれ。インドと映画と温泉が大好きな、まじめな、ナマケモノ。東洋大学文学部インド哲学科中退。高校時代に不登校となり旧大学入学資格検定にて進学。大学入学後、渡豪し、インドなどを放浪。「タポシ(Tapas)」は当時授かったサンスクリット語の名前。NPO法人にて救援活動やヨーガインストラクターなどを経て、現在はフリーランスのWeb企画制作、ITインストラクター、ラジオパーソナリティなど。IBS茨城放送土曜ワイド番組『notes.(ノーツ)』パーソナリティ(2011年4月〜2012年9月)

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食(かたい)となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや　　『小景異情』室生犀星

この歌には様々な解釈がある。それはきっと彼のふるさとへの思い自体が複雑だからなんだと思う。ふるさとに嫌気がさしているようでもあり、都会の夕暮れにふるさとを思い涙ぐむほど帰りたがっているようでもあり、それでもまたふるさとを発たねばならない。だが発ち難い……。僕のふるさともこんなだった。19 歳で水戸を、いや日本を飛び出した。英語を話せるようになりたいとか、広く世界を見聞したいとか、金髪の彼女がほしいとか……。こういう前向きな理由(最後のはちょっと違うかもしれないが)と裏腹に「こんな街、こんな国なんか出てってやる!」と思っていた。そして放浪。まさしく「異土の乞食」のように野宿をしながら「帰りたい」と思った。迎えてくれた父母の笑顔。暖かい水晶米のご飯と納豆。のんびりした街の景色。でも道半ばという思いもあり、養生が済むとまた出た。三十代になり、結局、挫折感と共に還ってきたふるさとは居心地が悪かった。年老いた父母。まるで変化を怖れ退化しかできないような街と人々に反吐が出そうになった。ところがしばらくするとまるで雪解けから古い岩肌や萌芽が現れるようにふるさとの良さに気づかされていった。僕はこんな遠回りをしてしまった。でもだからこそあえて言おう!「一度、茨城を否定しろ!ふるさとを毛嫌え!そして飛び出してしまえ!」ふるさとは一度否定して飛び出してみるべきだと僕は思う。生まれた場所だけがふるさとじゃない。そうして飛び出した新天地がふるさとになってもいい。もちろんまた帰ってきたっていい。客観性のないお国自慢は正直痛い。自国や民族の優位性ばかり主張しているとネトウヨみたいになっちまう。いろんな国や地域のモノやコトを見た上で、茨城の良さを見出し、いかに発信していくかを語り合うべきなのだと思う。そんないかしたことができそうな予感に満ちた「ALBE TREPPE」。都道府県イメージのワースト3 なんて気にしない。近説遠来「近き者よろこびて 遠き者来る」の言葉通り。そこに暮らし、住まう僕たちがふるさとを楽しもう! そして「いろんな遠く」へも行ってみよう!

メンバーからの声

あるもの探しで幸せ探し

アーティスト
平方亜弥子

佐賀市出身。笠間市在住。世界各地の音楽家たちと色をテーマにHaLo名義でアルバム"blue"と"yellow"を発表。ドキュメンタリーやCMのナレーション、イベントの司会などとしても活動中。これまで米国で日本語教師、都内で英語教師、茨城放送notes.でラジオパーソナリティ。英語通訳も時々。野菜、味噌、醤油を作り、地域の人たちと持ち寄りごはんを食べ、物々・情報交換する「つながる勉強会」を主宰。一児の新米母。
www.halo-inc.net

茨城に越して4年ちょっと。縁あって引っ越して来るまで私は茨城のことをほとんど知らなかった。

「アルベトレッペ」を知ったのはfacebookで面白い広報がスタートした時。カタカナで書かれた「アルベトレッペ」が「あるべ〜、とれっぺ?」という茨城弁だとCMで知り、そのユーモラスな響きにクスっと笑ってしまった。それは、2011年4月から一年半パーソナリティをしたラジオ番組notes.のコンセプトとも重なるものだった。水戸で「アルベトレッペ食堂」が行われた時は、茨城の優れた食材を提供する人と料理人、デザイナーがチームを組んで、料理としてプレゼンし、食べた人の投票で競う、という内容にわくわくして出かけた。スタッフはみんな気持ち良かったし、参加している人も真剣に楽しんでいたし、友人を応援するのも嬉しかった。イベントを通じて友人になった人もいたり、こんなお店、こんな人たちがいたんだ、ということを知るきっかけにもなって、すごく楽しいイベントだった。

同時期、私がほとんど知らなかった茨城のことをラジオnotes.であちこち取材に行った。日本唯一の洋上風力発電所は震災でも大丈夫だったってことも、自宅出産をサポートしてくれる助産院のことも、環境や暮らしへの問題提起のため10年以上野糞をし続けているあの人が茨城に住んでるってことも、その想いも含め伝えようとしてきた。農業生産量、品目、質ともに全国トップクラスで、実は東京の巨大な胃袋を支えていることとか、つくばに研究所が集まっていて最先端の研究が実は茨城で行われていることとか、ちゃんと認識していなかった。ラジオ番組は終わってしまったけど、アルベトレッペはこれからも茨城の人たちに「ほら、こんな素敵な人たちがいるでしょ」と再認識させてくれ、外に対して「こんないいものがあるんです」と見せてくれるはず。アルベトレッペ食堂のように、やってる人たちが真剣に楽しんでいて、その様子に、つい、引きこまれちゃうっていうのがいいと思う。

「アルベトレッペ」を私の生まれた佐賀でやるとすると「アローガトリューガ」かな、と思う。ホントは全国に「アルベトレッペ」はある。地域の人たちが周囲の「いいもの探し」をして、ああ、なんて素敵な人たちといいものに囲まれて暮らしているんだろうな、って思いながら暮らせたらいいなあ。コンセプトを全国展開しつつ、もっとあるもの探しでつながっていきたい。

メンバーからの声

私とアルベトレッペ

フリーアナウンサー
木村さおり

千葉県出身。元茨城放送アナウンサー。局アナ時代、パーソナリティー、ニュースキャスターを始め、ナレーションや司会、スポーツレポーターなど、様々な分野で活躍した後、2010年4月より、フリーに転身。現在、茨城放送「スマイル・スマイル」パーソナリティー他、司会やナレーションなどを担当。今年9月まで放送していた茨城放送「notes.」内のコーナー「アルベトレッペ通信」をきっかけにメンバーの皆さんとの交流を深める。茨城に居を構えて来年で丸20年、ますます茨城を愛するアラフォーアナウンサー。

「アルベトレッペ」。その言葉を初めて耳にした時、「イタリア語(?)のような、なんてお洒落な響きだろう・・」と思ってしまったのは私だけではないはず。(その時は信じて疑わなかった。まさか、お洒落ではなく駄洒落だったとは!)団体名に茨城弁を敢えて使用し、全く別物のようにアレンジしてしまう、そのセンスの高さと斬新さ・・まさに「参りました!」の一言であった。私とアルベトレッペとの出会いは、茨城放送で毎週土曜に放送されていた「notes.」という番組だった。まず感じたのは、メンバーの皆さんがとても魅力あふれる方ばかり!ということ。それぞれ本業を持ち、県内で幅広くご活躍されているにもかかわらず、日々茨城のいいものを発掘するために奮闘されている。特に凄いと思うのは、自らの利益や個人の仕事とは全く次元の違うところで繋がっているということだ。ゲストとしてお越しくださった皆さんもまさにそう。時に止まらない駄洒落(倉田さん、すみません〜)も含めて、この境界線のない活気溢れる雰囲気が、まさに「アルベトレッペ」なんだと実感した。また、『アルベトレッペは、ブランドではありません。茨城の「実は…」を掘り起こし、物語として語る「運動」です。』という活動趣旨にも共感を覚えた。私自身、この先ブランドといった「モノ」にのみ特化した地域おこしには限界がある。一歩踏み出したアイデアが必要なのでは・・と感じていた。そんな中、アルベトレッペの「物語として語る運動」というフレーズは特に心に響いた。何かが生まれるとき、必ずそこには誕生のストーリーがある。そして、成長のストーリーも。茨城のいいものにも、必ず関わった「ひと」のストーリーがあるはずだ。茨城発の「モノ」にとらわれず、「ひと」にまで広げて発掘を試みるアルベの活動は、まさに私の求めていた形に近かった。何かを生み出した「ひと」の思いを伝えるという点では、ラジオも同じであるからだ。事実、ラジオを通じて様々な「アルベトレッペ」をご紹介いただくたびに、新たな気付きや発見があった。例えば、高知県発の「四万十ドラマ」を取り上げた際も、「茨城」のいいものではないが、その「いいもの」をどう発信するかという意味で、参考にしたくなるような取り組みを紹介してくださった。(2012年6月16日放送)。また、常陸大宮市在住の陶芸家、菊地弘さんへのインタビューも、茨城に惹かれて他県から移り住んでこられたという視点から、茨城の魅力を語っていただくことに成功した。(2012年7月21日放送)。茨城発という垣根を越えて、いいものはどんどん取り入れようというアルベの視点は、茨城の魅力を発信するためになくてはならないものだと感じている。茨城にはまだ日の目を見ていない「アルベトレッペ」が沢山あるはずだ。毎日の生活に心を配り、人との繋がりを大切にするという延長線上には、素晴らしい「いいもの」との出会いが待っている。茨城を誇りに思い、愛してやまない「アルベトレッペ」の皆さんとともに、そんな出会いを形にするお手伝いができたらこんなに嬉しいことはない。

メンバーからの声

まちについて:メディアの宿題

フリーディレクター
山崎一希

常陸大宮市出身、水戸市在住。慶應義塾大学環境情報学部卒業後、2006年茨城放送入社。ディレクターとして『恭ノ介のココで語れば』などのワイド番組やラジオドラマの演出などを担当。2011年7月からフリー。2011年4月から翌年9月まで放送していた番組『notes.』では、アルベトレッペの運営メンバーとの協働により「アルベトレッペ通信」というコーナーを放送。共著書に『往復書簡・学校を語りなおす―「学び、遊び、逸れていく」ために』(新曜社)。

映画好きのYさんが、1ヶ月の間に茨城県内にておこなわれる映画の市民上映会の日時と場所をリストアップし、フェイスブックに書き込んでいた。意外に結構開かれているという事実に驚くとともに、そんな書き込みをしてくれた彼の心意気に思わず膝を打った。まちづくりってこういうことだよなあ、と。

その数日前、あるまちで大きなイベントが開かれた。例年バラバラの日程、場所でおこなわれていた催しを一同に集め、いっしょに行なうというイベントであった。大きな規模でおこなわれたこのイベントは、もともと分散していた時間と空間を、物理的に集約させたものだ。交通規制もあり、大きなコストがかかっている。それだけに天候に恵まれなかったのが残念で、ぼく自身も都合がつかず、ちょっと覗き見ただけで失礼してしまった。一日きりのイベントにはこういうリスクが付きまとう。

一方、市民上映会の日時と場所をまとめたYさんのリストも、分散している時間と空間を集約させた、ということができる。こちらは予算ゼロ。でも今まで誰もやろうとしなかったので、Yさんのつくったリストは映画ファンにとって貴重な情報となった。

ぼく自身大きなイベントが好きだし、地域の楽しみはたくさんあったほうがいい。また、インターネットが使えない人、車などの移動手段をもたない人のことを考えれば、時間、空間が物理的に集約する機会をつくることはとても大切なことだ。とはいえ、「集約」という掛け算の解を、同じ時間に、同じ空間で何かをするという、打ち上げ花火のようなことにしか求められないとしたら、それは貧困な発想である。Yさんがフェイスブックでやってのけたように、メディアを駆使すれば掛け算の解法はいくらでもつくれる。

ただ、そうした発想の源泉は、メディアの側ももっと示すべきだと考えている。それぞれの媒体の特性を一番知っている(はずの)プロフェッショナルたちは、まちの人たちが社会のためにメディアを使うための魅力的なアイディアを、どれだけ提示できているだろうか。アルベトレッペのメンバーといっしょに構成してきた『アルベトレッペ通信』というラジオ番組は、そういう現状を打破するためのささやかな試みであった。番組は終わってしまったが、ぼく個人としては、市民がメディアを使い、社会をよくするための実践を提案し、形にしていくことを生業にしていきたいと思っている。